

## B. 赤十字国際委員会博物館

赤十字国際委員会博物館は2日目の午後、国連のヨーロッパ本部を訪れてからの見学だった。博物館には、私たち以外にも世界各地から多くの学生などが訪れていた。

ここでは、各自のペースで勉強をした。日本語による自動音声ガイドがあったため、一つの展示物をきちんと理解しながら見学することができた。

### 1. 赤十字国際委員会とは



(図1)



(図2)

赤十字国際委員会(ICRC)は、戦争や武力紛争の犠牲を強いられた人々に対して人道的保護と支援を行う、公平にして中立、かつ独立した機関である<sup>1</sup>。本部はスイスのジュネーブにあり、日本を含む、世界約90カ国で13,000人以上の職員が活動している。関連組織として赤新月社、国際赤十字・赤新月社連盟などがあげられる。

赤十字と聞けば、赤い十字マークを思い浮かべる人も多いだろう。しかし、活動範囲が広まった近年では、赤新月社連盟に加盟する赤新月社などは、イスラム諸国を含む31カ国で活動する際に赤い月のマークを使用する(図2)。イスラム諸国ではキリスト教をイメージさせる十字のデザインは好まれなかったためと言える。

### 2. 設立のきっかけ

赤十字国際委員会設立のきっかけは、スイスの実業家であるアンリー・デュナンがイタリア統一戦争当時のソルフェリーノで9,000人もの負傷兵が治療も受けられることもなく横たわり、放置されている様を目撃したことであったという。その時代、ヨーロッパは絶対君主制国家が領土の拡大を図り、近隣諸国やヨーロッパ以外の国々との戦いが盛んな時期である。

イタリアからスイスのジュネーブに戻ったアンリー・デュナンは、「ソルフェリーノの思

い出」を出版した。その中で戦争時には傷ついた人々を敵味方関係なく救うという「赤十字思想」を誕生させ、それらに賛同した4人のスイス人とともに、1863年に赤十字の最初の機関として「五人委員会」が誕生した。これらが発展して、現在の赤十字国際委員会になる。現代では第二次世界大戦の教訓も踏まえ、兵士だけではなく、一般市民への保護や支援といった時代に沿った人道的活動が拡大された。

### 3. 訪問

展示は、目撃者の部屋、人間の尊厳の擁護、家族の絆の再構築と、大きく3つに分けられていた。目撃者の部屋では、実際に戦争などの体験者が人物大のモニターに写し出され、私たちが手をかざすと各人の体験などを語ってくれる。それらは、自分の今の生活とはほど遠いもので、想像を絶する物ばかりであった。きっと彼らのような人々は、人道的支援の届かないところにも何万といるだろう。人権的な弱者を救済する組織や活動、並びに枠組みの必要性を感じた。

特に印象的だったのは家族の絆の再構築の部屋である。捕虜となった兵士の情報収集・整理、それらを家族などに提供する活動も赤十字国際委員会が行っていた。

捕虜となった兵士の情報収集・整理を体験できるコーナーもある。このコーナーでは、まず国際捕虜情報局は捕虜のリストである資料A(図3)を基礎として、各人について資料B(図4)の作成されていることが確認できる。



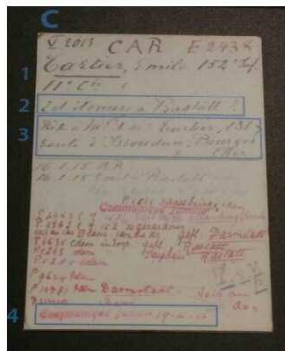
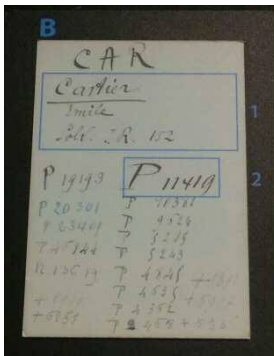
資料A(図3)



資料B(図4)

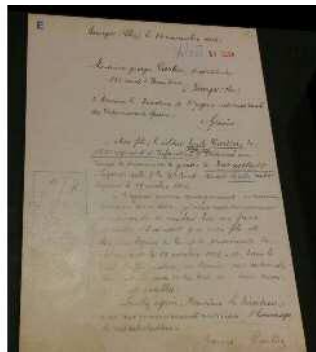
これは国際捕虜情報局の捕虜のリストである記録簿(資料A)

- ① 国際捕虜情報局が捕虜のリストを受領した日付
- ② リストの番号
- ③ ロシア陸軍省より送られてきたフラン人戦争捕虜のリスト
- ④ 捕虜の名前「カルチ・エミール」階級第152歩兵連隊兵卒  
右大腿部の負傷によりドイツに収容ということがわかる



←資料 C (図 6)  
家族からの搜索願

↑資料 B (図 5) 国際捕虜情報局は A の記録により資料を作成



←資料 E (図 8)  
死亡通知書

↑資料 D (図 7) 国際捕虜情報局による家族への返事

そして、家族から消息を訪ねる願いである資料 C (図 6) が出されると、赤十字は資料 D (図 7) を作成する。それらのデータの類似性で捕虜と家族を引き合わせる。非常にシンプルな作業に見えるが、現代のようにコンピューターなどを使い、データによる管理ではない。ひとつひとつが手書きであり、莫大な捕虜達の中から家族から搜索願が出された一人だけを見つけるという手作業である。

この活動が離れ離れになっていた家族同士を再び結びつけ、家族の絆の再構築に大きく貢献したのは言うまでもない。

#### 4. 感想

赤十字国際委員会という組織については、今まで、なんとなく耳にしたこともあり漠然と知っていたが、実際の活動についてここまで詳細に知る機会はこの研修に参加しなければ得ることはできなかつたろう。ここまで人道的に、公平に人間の生や権利を尊重して活動をしているこの組織の理念に私も賛同する。「人権」について、この研修で触れる機会が非常に多かった。

法学部であるがゆえ、講義内でも人権というキーワードが取り上げられることがこれからも沢山あるだろう。それらを耳にしてあって当然と思うのではなく、人々が努力し、築き、勝ち取ってきた権利であると受け止め、これからの学生生活においても継続的に向き合っていきたい。

赤十字国際委員会 ICRC について参照。 <http://jp.icrc.org/abouticrc/>

(西山 望／法学部 2 年)

